2025 年 8 月 31 日　説教「主の祈り」

ルカの福音書 11 章 1～4 節

10 章末尾にはベタニヤ村のマルタとマリヤの話から、マルタへの主の教えをみました。「どうしても必要なものはわずかです。いや、一つだけです」は印象深いお言葉でした。

１．祈りを教えてください（1 節）

①イエスは祈っておられた（1）**「さて、イエスはある所で祈っておられた。」**

イエス・キリストが祈っておられたのがどこであるのかはわかりません。前段ではベタニヤでしたが、その後も北に向かわれた可能性も高く（17:11 参照）場所は特定できないのです。ともあれ、イエスがことあるごとに、一人祈られることも多かったのです。主が姿変りをされた時も、イエスとペテロ、ヨハネ、ヤコブとともに山に上って祈るためでした。「静けき祈りのときはいと楽し」（讃美歌 310）とありますが、主イエスにとって、父なる神と祈る時は無くてはならぬものでありました。

②弟子達の要望（1）**「祈りが終わると、弟子のひとりが、イエスに言った。『主よ。ヨハネが弟子たちに教えたように、私たちにも祈りを教えてください。』」**

イエスが祈る間は、弟子達も祈りをしていたと思われます。声を出して祈ることもあったでしょう。祈りが終わりになるころは、それとなくわかるものです。アーメンという声が聞こえてきたことでしょう。祈りが終わったのを見計らって、弟子の一人がイエスにお願いをしたのです。その願いは祈りの教授でした。バプテスマのヨハネにも弟子団があり、ヨハネはその弟子達に祈祷文を示していたようなのです。ユダヤ教会でも定式の祈祷文があったとのことで、ヨハネも独自の祈祷文を示したのだと思われます。そこで、イエスの弟子たちも、その要望があり、一人が「あのヨハネが弟子達に教えたように、私たちにも祈りを教えてください」と願ったのです。

２．主の祈りの始め（2 節）

①イエスの答え（2）**「そこでイエスは、彼らに言われた。『祈るときには、こう言いなさい。」**

イエスは弟子の要望を受けて、彼らに言われたのです。つまり、一人の弟子からの要望でしたが、弟子達みなに向けて言われたのです。「祈るときには、こう言いなさい。」。祈祷をこのようにしなさいと言われたのです。以下は「主の祈り」になります。マタイの福音書には、山上の説教のなかにそれが示されています（6:9～13）。マタイの福音書にある主の祈りに比べると、ルカの福音書の方が少しコンパクトです。以下、比較しながら見て行きましょう。私たちが毎週唱えている主の祈りはマタイの福音書に基づきます。

②御名が崇められる（2）**「『父よ。御名があがめられますように。』」**

まずは神への呼びかけです。マタイの福音書では「天にいます私たちの父よ。」とあります。ルカでは『父よ』とあって修飾がありません。双方とも父なる神に呼びかけています。「御名があがめられますように」は同じです。

聖書協会共同訳では「御名が聖とされますように」とあります。御名が聖とされるために、私たちが聖なる主を崇めていくようにとも祈らされるのです。

③御国到来の祈り (2) **「『御国が来ますように。』」**

「御国が来ますように」は双方同じですが、マタイの方ではその後に「みこころが天で行われるように、地でも行われますように」が続きます。そこからでもわかるように、御国は主のご支配のなかに、罪が入り込んでおらず、麗しく、喜ばしく、平和なところなのです。一方、地には罪が入り込んでいて、サタンの働きが活発なのです。そこは、主の創造された地ですから麗しさを残しています。また主の愛が注がれ、守り、導き、備えがあります。しかし、争いは絶えず、律法、主の教えは破られて悲惨なのです。だからこそ、「御国が来ますように」と祈らされるのです。

３．主の祈り―現実への願い（3～4 節）

①日ごとの糧を (3) **「『私たちの日ごとの糧を毎日お与え下さい。』」**

ここからは生きる者たちの現実的必要に関しての祈りです。マタイでは、「日ごとの糧を『今日も』お与えください。」となり、ルカでは『毎日』となっています。「私たちの」とあるのは、この日々の糧への切実な祈りが、自らと家族ばかりでなく、主にある家族、さらには今日の糧を必要としているすべての者の必要が満たされるように祈るのです。さらには、私たちの霊的な糧をも備えられるように祈ることにもなります。

②罪の赦しを (4) **「『私たちの罪をお赦しください。私たちも私たちに負いめのある者をみな赦します。』」**

「私たちの罪をお赦しください。」は、まさに率直な罪の告白に伴う赦しを請うています。後半部分について、マタイでは「負い目ある者を赦しました。」とありますが、ルカの福音書では、「負い目ある者をみな赦します。」という決意の言葉となっています。負い目とは負債と言い換えることができますが、経済的負債というよりも、罪を犯すことによって生じる負債のことです。ここでは、自分に対して相当の痛み苦しみを与えるような罪を犯した人を赦すということです。自分の側にも問題があるかもしれませんが、赦せないでいる人を赦すことを祈らされているのです。

③試みに会わせず (4) **「『私たちを試みに会わせないでください。』」**

マタイでは「私たちを試み会わせないで、悪からお救いください。」とあります。ヤコブの手紙には「さまざまな試練に会うときは、それをこの上もない喜びと思いなさい」（1:2）など、聖書の中には試練を積極的に受け止める信仰思想があります。また試練は「訓練と思って耐え忍びなさい」（ヘブル 12:7）という御言葉もあります。しかし、主イエスはこの節で、率直に「試みに会わせないでください」と祈ることを教えてくださっているのです。

主の祈りの最後にはマタイにあるように、「国と力と栄えは、とこしえにあなものです」とありますが、ルカにはその祈りはありません。

《結論》ルカの福音書 10 章後半では、律法の専門家によって、永遠の命を得るにはどうしたら良いのかというイエスへの質問が出されました。律法の専門家自身が「心を尽くし、思いを尽くし、力を尽くし、知性を尽くして主なる神を愛せよ」をまずあげました。それは正答でした。しかし、彼はいつの間にか救いを行いへと結びつける議論へと進めました。ベタニヤ村でのマルタへの教えでは、無くてならぬものは御言葉にあるのだということを示されたことでした。

今朝の聖書箇所にある「主の祈り」は旧約律法の根幹である十戒（出エジプト 20 章）を思い出させます。つまり、十戒は 1～4 戒は神との関係における戒めであり、5戒から 10 戒は人間関係における戒めです。イエスが教えてくださった主の祈りも、前半は神との関係における祈りであり、後半は人との関係における祈りとなっています。そして、これはルカ 10 章後半の教えの方向ともつながっています。まとめとして、二つの点をこの祈りについて考えていきます。

まず、「主の祈り」の神との関係について、「神を神とする」ことについて考えます。私たちは、ともすると天の父なる神を、地に引きずりおろし、自らの都合の良いようにしてしまいます。神を自分に合わせてハンドルし、自分に治まらない部分については無視するのです。しかし、それでは、御名があがめられることにはなりません。御名があがめられずに、人間の自己中心に陥るだけです。御名が聖とされるのではなく、御名を俗なるものに貶めてしまうのです。また、神を自らの手中におさめようとするならば、御国はやってきません。御国をこの世のレベルに引き下げことになるからです。神を神とすることが、「御名があがめられますように」という祈りにつながります。また「御国がきますように」という祈りを真実なものへとなしていくのです。

「主の祈り」の後半について考えます。ある方が「主の祈り」を祈っていて、この部分になると声が小さくなってしまうと言いました。「私たちの罪を赦してください。私たちも私たちに負い目あるものをみな赦します」という祈りです。どうしても赦せない人がいて、「赦します」と祈れないというのです。同じようなことを数人から聞きました。傷ついた自分の心がある人の故であるとか、今の自分の苦しみや悩みはその人の言動によるものだと思えば赦せないのです。その人の偽善的振る舞いを思うと、そう簡単に赦して良いとも思えないという時もありましょう。一方で、人に赦してもらいたいとしきりに願う場合があります。しかし、この場合も「人を赦せない」というのと表裏一体なのではと考えられます。なぜなら、「赦せない」も「赦してほしい」も、どこまでも人間から解答を求め、人間から平安を得ようとしているからです。神との関係こそこの問題を解く鍵があります。そこで「私たちの罪をお赦しください」という祈りが浮かび上がってきます。この祈りに、人を赦し、自らの罪の暗部を見いだす端緒があるのです。「主の祈り」のなかに「赦し」を選ばれたのは、主の深いお考えに基づくものです。今朝、あなたも罪の赦しを祈りましょう。また、赦せない心を主に申し上げていきましょう。